

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	七森真央 (ななもりまお)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	人間科学研究科修士課程 2 年
発表年月 または事業開催年月	2023 年 10 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本認知・行動療法学会第 49 回大会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	七森真央
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	視線知覚と社交不安症の関連における文献レビュー
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>【目的】 社交不安症 (Social Anxiety Disorder: 以下, SAD) とは, 他者の注目を浴びる可能性のある社交場面に対する著しい恐怖または不安を特徴とする精神疾患である (American Psychiatric Association: APA, 2013)。SAD 患者と SAD の診断がつかない高社交不安者には, 維持要因などの心理的特徴の連続性があることが指摘されている (Kollman et al., 2006)。SAD の特徴として, 他者から向けられる視線を過剰に感じる, 視線知覚の過剰性が挙げられる (Schulze et al., 2013)。一般に, 人間は実際の人物から向けられる視線やビデオ撮影された人物の視線を判断する場合, 非常に正確に視線方向を判断することができる (Symons et al., 2004)。SAD とアイコンタクトに関する先行研究では, SAD 患者はそうでない人と比べ, 目を合わせている顔を見るときに, 自律神経と自己評価の覚醒が高まり, 自己評価の感情がより否定的に評価されることが示されている (Myllyneva et al., 2015)。視線知覚の測定において, Germer and Hecht (2007) は, 人が見られていると感じるかなりの幅の範囲が存在すると仮定し, 人が視線を感じている範囲である Cone of Direct Gaze (CoDG) を測定する心理物理学的パラダイムを開発した。CoDG に関する先行研究では, コールドプレッシャー・テストによってストレス状態を高めた群は, コントロール群と比較して CoDG が広いことが示されている (Rimmele & Lobmaier, 2011)。先行研究において, 視線知覚と SAD との関連は示唆されているものの, CoDG で測定された視線知覚と SAD の関連を見た研究は少なく, 整理されていない。そこで, 本研究では SAD と CoDG の関連について先行研究を概観, 整理し, 今後の研究の展望について検討することを目的とする。本研究は先行研究による知見が少ないことから, ナラティブレビューを行った。</p> <p>【方法】 分析対象とする文献の適格基準は, CoDG の指標を用いて SAD 患者を対象とした学術論文, または SAD に関連する指標を用いた学術論文とした。英語または日本語で書かれた研究を基準として論文データの選択を行った。論文の検索では, 国内文献は, Google Scholar, 学内検索サービス WINE, J-STAGE を用いて, "CoDG" AND "社交不安症" をキーワードとして検索した。また, 海外文献は PubMed と Web of Science を用いて "cone of direct gaze and social anxiety" もしくは, "gaze cone and social anxiety" をキーワードとした。CoDG を指標として用いていない文献や, SAD に関する指標を用いていない文献は除外した。本研究において 利益相反関係にある企業等はない。</p> <p>【結果】 論文検索を行ったところ, 国内文献では, "CoDG" AND "社交不安症" のキーワードにお</p>	

いては、文献は検出されず、0件であった。海外文献では、“cone of direct gaze and social anxiety”のキーワードにおいては8件の文献が検出された。8件のうち7件は、SADに関する指標を用いておらず、基準を満たした論文は以下の1件であった。

[1] Jun et al. (2013) は、93名の参加者を高社交不安者と低社交不安者に分けて CoDG を測定した。その結果、女性においては、高社交不安者と低社交不安者に CoDG の有意差は見られなかったものの、男性においては、高社交不安者は低社交不安者よりも CoDG が広いことが示された。

また、“gaze cone and social anxiety”をキーワードとして検索した結果、5件の文献が検出された。5件のうち1件は上述した論文であり、1件はSADに関する指標を用いていなかったため、基準を満たした論文は以下の4件であった。

[2] Harbort et al. (2013) では、18名のSAD患者と23名の健常者を対象に、SAD患者群に対して認知行動療法を行い、介入前後でCoDGを測定した。その結果、介入前においてはCoDGに群間の有意差が見られたものの、介入後においては有意差が消失し、SAD患者群におけるCoDGの改善が見られたことが示された。

[3] Chen et al. (2017) では、28名の対象者に質問紙調査とCoDGの測定を行なった結果、ポジティブ感情とネガティブ感情はCoDGとの関連を示さなかったものの、SADの質問紙指標であるthe Social Phobia Scale (SPS; Mattick and Clarke, 1998)の得点とCoDGの間に正の相関があることを示した。

[4] Harbort et al. (2017) では、20名のSAD患者と20名の健常者を対象にCoDGを測定しその幅について検討した。この研究では、参加者がパソコン上の1つの頭部の視線の向きに対して評価する課題を用いてCoDGを測定している。評価する頭部以外に、最大で4つの頭部が追加で存在する課題設計となっており、頭部の数の増減によって社会的脅威を操作している。その結果、SAD患者は健常者と比較してより広いCoDGを示したことが示された。また、SAD患者と健常者の両群において、頭部の数が多いほどCoDGは広くなることが示された。

[5] Hecht et al. (2011) では、SAD患者と健常者を対象にCoDGを測定しその幅について検討した。この研究で用いられた課題では、視線を評価する参加者とパソコン上で視線が動く頭部が向き合う1対1の状況と、パソコン上に第2の頭部が追加で存在している1対2の状況で比較を行なった。その結果、1対1の状況では健常者とSAD患者にCoDGの差はないが、第2の頭部が存在する場合、その頭部の頭の向きと視線の向きに関わらず、SAD患者においてCoDGが有意に拡大したことを明らかにした。

【結論と今後の展望】

論文検索を通して、CoDGによって測定される視線知覚とSADについて、関連を示唆する研究が複数存在することが明らかとなった。先行研究では、[1]や[3]においてCoDGとSADの関連が示されているだけでなく、[4]や[5]において、視線の向きを評価する頭部に追加して別の頭部が存在する場合、CoDGがより広くなることも示されていることがわかった。また、[2]ではSAD患者に対してClark and Wells (1995) に基づいた25セッションの認知行動療法を適用した場合にCoDGが変化することが示されており、SADにおける認知行動療法の文脈においてCoDGを検討する必要性が示唆されたことがわかった。SADの維持要因の一つに、自分に対して過度に注意が向かう状態を指す自己注目が挙げられており、不安や恐怖を維持させることが示されている (Spurr & Stopa, 2002)。高社交不安者の自己注目の誘発要因を検討した研究では、日常生活下の社交場面において視線知覚が自己注目を高めることが示されている (Nanamori et al., 2023)。しかし、先行研究ではSADとCoDGとの関連の検証のみにとどまっており、自己注目といったSADにおける維持要因とCoDGとの関連を検討した研究は見受けられない。今後は、それらの関係性を詳細に検討した上で、SADを有する者における視線知覚の過剰性を修正するアプローチについて検討する必要がある。